

前号の続きです。長文ですが、ご容赦ください。

辻井いつ子さんの子育て論 その② 興味を持ったことは全部やらせてみる

こうして、様々な経験を積む中で、伸行が興味を持ったことは何でもやらせました。意外に思う方もいるかもしれませんが、伸行はプールが大好きで、クロールが大の得意なのです。音楽だって、ピアノ一筋ではありませんでした。まだ伸行が小さかった頃は、プロのピアニストにしようだなんて考えていませんでした。本人がやりたいと思うことは、まずはやらせてみました。4歳を迎えた保育園時代に興味を示したのはハーモニカです。耳で一度メロディを聴くと、すぐにハーモニカで吹けるようになるのには、我が子ながら舌を巻きました。私が少女時代に習っていた琴にも関心を持ち、「さくら」「ロバさん」「吉野山」など、私が弾く簡単な曲はすぐに覚えて、小さな手で上手に弾いてくれたものです。バイオリンは、テレビを観ていた時にたまたま音を聴いて「どんな楽器なの？」と尋ねてきたのがきっかけでした。それからタウンページでバイオリン教室を探して、2年ほど通いました。結果としては、寄り道だったのかもしれませんが、伸行の音楽の感性を磨くうえで、貴重な経験だったと思います。様々な音楽に触れる中で、5歳のときに、伸行がピアニストになりたいと思うようになる、大きなきっかけがありました。家族でサイパンに出かけた時のことです。ショッピングモールを歩いていると、どこからかピアノの音色が聞こえてきます。そのことに気づいた伸行が「弾きたい」とねだり始めました。見ると、チェーンで囲まれた柵の中に自動で鍵盤が動くピアノが1台置いてあり、音楽はそこから聞こえてきました。「自動演奏のピアノだから弾けないのよ」と伝えましたが、伸行はどうしても「弾きたい」と言います。そこで、お店の方をお願いしたところ、快く自動演奏を解除してくださいました。伸行は大喜びで、リチャード・クレイダーマンの「渚のアデリーヌ」を弾き始めました。すると、だんだんと周囲に人が集まってきて、演奏に聴き入っています。まだ小さな子どもが、大人の曲を弾いていたこともあったのでしょう。そして、終わったとたん、「ブラボー!!」「ジーニアスボーイ」という歓声が周囲から沸き起こり、伸行は抱きしめられたり、キスをされたりしています。伸行は得意満面の笑顔でした。それまで、家の中でピアノを演奏して家族に拍手されることはありましたが、一般の、それも多くの聴衆に拍手されたのは初めてのことでした。それは、伸行にとって大きな自信につながりましたし、私から見ても「この子は人を魅了する何かが備わっている」と思う出来事でもありました。



<辻井いつ子>

1960年、東京生まれ。東京女学館短大卒業後、フリーのアナウンサーとして活躍。長男・伸行が生後まもなく全盲とわかり、絶望と不安のなか、手探りで子育てをスタートするが、生後8ヵ月で伸行の音楽の才能を見つけ、プロのピアニストへと二人三脚で歩む。著書に『今日の風、なに色?』『のぶカンタービレ!』『親ばか力〜子どもの才能を引き出す10の法則〜』（いずれもアスコム刊）がある。

子どもが自信をつけたら、あとは褒めればいい

また、盲学校（小学校）に進級してからのこと。年に一度、普通学校との交流会が行われ、一緒に授業を受けたり、レクレーションをしながら交流を深めたりします。最初こそ慣れない雰囲気戸惑っていた伸行ですが、トコトコとピアノに駆け寄り、ドビュッシーの「夢」の演奏を始めると空気が一変しました。周囲の子どもたちは驚いた表情で「辻井君、すごいね」と口々に話すのです。伸行はサイパンの時と同じ、照れながらもとても得意そうな顔をしていました。この頃、伸行に「僕、目が見えたらよかったな」といわれ、心底ドキッとしたことがあります。けれども、続けて「でも、いいや。僕はピアノが弾けるから。他の子より上手に弾けるんだから」と続けて一人でうなずきました。こうして、伸行がピアノに関して、日々自信を深めているのがよくわかりました。伸行の人生の中で、ピアノがなくてはならない存在になってきたのです。家庭においても、伸行が演奏した後は「伸りん、がんばった。素敵な演奏だった。もっと聴かせて。次はどんな曲を弾かせてくれるか楽しみにしているわ!」と、常に言葉をかけてきました。別に、おだてたわけではなくて、私自身が音楽には素人でしたし、少女時代にピアノを習ったこともありましたが、とても伸行のように上手に弾けたわけではありませんでした。なぜ、右手と左手が別々の動きをするような、難しい楽器を弾けるのだろうと、心の底から感心していたのです。母になってみて、自分ができなかったことを息子がやっているわけですから、素直に感動して、自然とほめる言葉が出てきたようです。やがて、10歳で初めて本格的なコンクール「ピティナ・ピアノコンペティション」に、出場して金賞をいただくにあたり、プロのピアニストになるという夢が、徐々に2人の心の中にふくらんできました。もちろん、今までより一段と厳しい坂道を登っていくことでもあります。それは狭き門ではありましたが、何より、伸行自身の「やりたい」という気持ちを一番大事にしたかったのです。大人は、往々にして自分の経験で子どもに歩み方を押し付けてしまいがちです。そのほうが「安全」だと思うのですが、時代がこれだけ変化し続けているのに親の価値観で道を選ぶことが、本当に「安全」なのでしょうか。むしろ子どもの自主性を育てないことのほうが「危険」だと感じます。自分の人生を切り開く自主決定力を子どもに育むことで、豊かな未来を子どもは獲得していくのではないのでしょうか。最初からあきらめてしまっては、未来への扉は開かないのですから。

裏面に【「親ばか力」で才能を引き出す10の法則】あり。

本校ホームページをご活用ください。

本校ホームページには、保護者への重要な連絡から給食の献立表に至るまで、様々なコンテンツを掲載しています。本年度から、より一層内容の充実に取り組んでいます。どうぞ定期的にご覧ください。以下のQRコードにて、スマホでも即座に見て頂くことができます。



【「親ばか力」で才能を引き出す 10 の法則 】

『親ばか力』(辻井いつ子著・アスコム刊)より

① 子どもの可能性を信じる

わが子の「ダメな姿」に惑わされず、この子には引き出されることを待っている
大きな可能性が必ずある、と強く信じる。「もしかして天才かも」という気持ちを持ち続ける。

② よく観察し、才能の種を発見する

愛情を持って子どもを見つめ、小さな反応や変化を見落とさず、
何に興味と関心をもっているかを見極める。親の固定観念で子どもを見ない。

③ 始めるのに「早すぎる」はない

子どもが興味をもつこと、やりたがることを積極的に援助し、「やる気」をふくらませる。
「才能」の発見は早いほどいい。そして、子どもといっしょに親もやってみる。

④ 思いっきりほめる、抱きしめる

少しでも良いところはどんどんほめ、愛情込めて抱きしめる。小さな達成感を味わわせて積み重ね、
自信をもたせる。自分ががんばれば喜んでくれる人が身近にいることを体感させる。

⑤ ネガティブな言葉は使わない

「できない」「無理」「ダメ」といった消極的な言葉は禁物。
「大丈夫」「きっとできる」「いつもどおりやればいいのよ」とポジティブな言葉で背中を押してあげる。

⑥ ファン第1号になる

子どもの「やる気」が定まってきたら、親子で夢を共有し、親は子どもの「ファン第1号」になって
応援する。うまくいってもいなくても、支えてくれる人がいるという安心感が大切。

⑦ ひらめいたら即アクション

ダメでもともと。プラス思考に徹し、失敗を恐れず、思い立ったらすぐに実行という
「勇気と決断力」をもつ。やってみてダメなら次にトライすればいい。

⑧ 本物に触れさせる

目先の結果より、心を耕すことが大切。五感で味わう大自然、生演奏の音の輝き…
本物だからこそその「力」を体感させる。本物の迫力が子どもの心を豊かにする。

⑨ いい先生を見つける

人との出会いを大切に。親のできることは限られている。
おじけず積極的にアプローチして、アドバイスとパワーとチャンスをいただく。

⑩ 明るく楽しく、あきらめない

どうせやるなら親自身が明るく楽しく。暗くなってちゃ始まらない。
そのプラス感覚が子どもの養分になる。そして、あきらめない熱意でチャンスと呼び寄せよう。

＊「親ばか力」とは、モンスターペアレントをはじめとする、自己中心的な親ばかになることではありません。
親が、子どもの可能性を信じて、よく観察する。そして、たっぷりの愛情をもってほめ、応援することで、
子どもの才能を引き出してあげる力のことです。